

われる。華川町下小津田にはカニ畑・タラメキ・吹上・金沢・菅ノ沢・阿吹・天上堀子・火ノ口・蟹畑の小字がある。関本町八反には足茅・鬼田（鬼は産鉄民の異称であることが多い）・入道（タラ入道という言葉があるが、ダイダラ坊に關係あるか）がある。

このようにみてみるとジュウドノ神社は間違いなく産鉄に關係したものである。「種殿」と書いて「じゅうどの」と読ませるのも、たたら歌に「種を植えます、お火種を」と歌われるように「種」には砂鉄の意があるからであろう。

横山氏によると「ジュウドノ」神社の成立は十六世紀といわれ、祭神は倉稻魂命、保食命、大己貴命、猿田彦命、大山祇命等であって、十殿は文字通り十社の意味ではないかと笹岡氏は分析しているという。

神社の成立はかりに中世であっても、この製鉄神が多珂郡域にのみ集中していることは、タカ地名の背景を暗示しているように思われるのである。

どうやら常陸国の多珂郡も、やはり「タカ」をシンボルマークとする産鉄族の開發する所であったといえそうである。

## 和同開珎とインフレ

新井 宏

紙幣のように数えることのできる通貨、すなわち計数貨幣としては、ローマやヨーロッパあるいはイスラム諸国では、いつも金貨と銀貨が中心であった。それに対して、中国をはじめとするアジアでは、錢すなわち銅貨が中心であり、金銀が主要な計数貨幣となったのは、江戸時代の小判の例があるだけである。近世に入って、中国でも日本でも、銀が重要な交換手段として登場しながら、それは地金の重量を計って用いる秤量貨幣としてのものであり、決して主要な計数貨幣にはならなかった。そんな状況が、東西間の歴史に面白い違いを生じさせている。

すなわち、金貨や銀貨の場合、明らかに地金の価値に基準があったのに対して、銅貨の場合は、一方で地金の価値を持ちながら、もう一方では地金の価値から大きく乖離する場合もあり、金銀貨と紙幣の両棲的な性質を發揮していたのである。しかも、その典型的な事例が、日本の最初の通貨和同開珎と皇朝十二錢に色濃く認められる。

### 最古の通貨・和同開珎

和同開珎。今日では「かいちん」と読むのが主流である。しかし「和銅開宝」と習った方も多い

であろう。それは我が愛する狩谷掖斎が、和同開珎の同は銅の略字であり、珎は「寶」のウ冠と貝を外した略字と見たからである。江戸時代後期の豪商米問屋でありながら、漢学者、国学者、考証学者、言語学者、計量学者にして名書家でもあった掖斎。江戸時代にあつて掖斎ほど科学的な考証に徹した学者がいたことは、真に驚くべきことであり、筆者の主フィールドである計量史の世界においても、掖斎の『本朝度量權衡攷』は燦と輝いている。昭和になつて出された計量史のバイブル藤田元春の『尺度綜考』も、現在の知見からすれば掖斎の考察の足元にも及ばない。その掖斎が「開宝」といったのであるから、それに従いたい気持ちもあるが、ここで深入りしている余裕はない。

慶雲五年（七〇八）秩父郡から和銅（自然銅）が出たことで、年号が和銅と改まった。そしてその年の五月に和同開珎の銀銭が、更に八月に和同開珎の銅銭が発行されている。すなわち、和銅ではなく和同であり、銅銭ではなく銀銭が先に出されたのである。しかも、その銅銭には、秩父の和銅が使われたわけではなく、長門長登鉾山の銅、すなわち東大寺の大仏と同じ銅が用いられた。そのため、和銅と和同開珎とは直接的な関係はなく、和同開珎は和銅年間の前から存在していた可能性さえも指摘されている。いわゆる「古和同」説である。

和銅の吉祥に沸くなかで、なぜ銅銭でなく銀銭が先に発行されたのか。その時、銀銭や銅銭がどのような価値で発行され、どのような価値で用いられたのか。そして皇朝十二銭とどんな関係を持ち、如何にして廃れていったか。そこには従来の学説が、踏み込んでいない空白の領域がある。

### なぜ銀銭が先行したか

和銅開珎ではなぜ銀銭が先に発行されたか。こんな単純なことも、意外に従来の学説は明快に示すことがない。それは和同開珎に先立ち、無文銀銭が既に流通していたことと無関係ではない。

和銅年間以前に使用されていた無文銀銭は、大津市の山中の崇福寺の埋納孔から発見された十一枚の他、五ヶ所から合計で十六枚見つかっている。そのうち特に大型の三十五・七グラムのものを除くと、ほとんどが九グラムから十グラムの間にあり、重さを調整するための小銀片さえ貼付されているものがある。この九グラムから十グラムという重さは、当時の計量単位の大両（約三十七・五グラム、小両の三倍）の四分の一すなわち大両の一分に相当している。大型の無文銀銭をちょうど大両の重さと見れば、これらが銀地金価値を基にした半計数通貨であったと考えると、まず間違いないであろう。一方、和同開珎の銀銭は多少ばらつきはあるが、平均して六グラム前後である。

これらの事実は何を意味しているのだろうか。和同銀銭（六グラム）に国権の印を鑄出するのとて、銀地金一分（九グラム）と等価が付与された可能性が極めて高いのである。すなわち律令政府から見れば約四十パーセントの出目であり、案の定、直ちに私鑄銭が現れる。

そして和同開珎の銀銭発行の三ヶ月後に、銅銭が発行される。この時、銀銭と銅銭の価値比率がどう決められたか、史書は何も伝えていない。そのため学者は、こんな重要なことに及び腰である。それなら筆者の出番である。和銅開珎の銀銭と銅銭の動きを簡単にまとめて見よう。

和銅元年（七〇八）五月 銀銭発行

八月 銅銭発行

和銅二年（七〇九）一月 銀錢私鑄の嚴罰布告

三月 四文以上の売買には銀錢、三文以下には銅錢を用いること

八月 銀錢を廃止し、流通貨は銅錢のみとすること

和銅三年（七一〇）九月 銀錢の禁止

養老五年（七二二）一月 銀錢・銀地金の流通を再許可し、銀錢一枚を銅錢二十五枚、銀地金一

両を銅錢百枚と設定

養老六年（七二三）二月 銀地金一両を銅錢二百枚と改定

このような経過で、養老五年には銀錢と銅錢の比が二十五となり、ついで翌養老六年に五十となったことは判っている。

しかし肝心のスタート時点の比価については判らない。和銅二年三月の規定から銀錢一枚が銅錢四枚に相当していたという説、天平寶字四年（七六〇）の大平元宝（銀錢）と万年通宝（銅錢）の比が十であったことから類推し、銀錢一枚が銅錢十枚であったとする説、あるいは元々最初から銀錢一枚が銅錢二十五枚に相当していたとする説まで様々である。

筆者の研究結果によれば、当時の銀と銅の地金価格の比は、おおよそ百倍である。銀錢一枚に対して、銅錢四枚であれ、十枚であれ、あるいは二十五枚であれ、地金価格に比して、銅錢が異様に高い価値があたえられていた。律令政府の意図が、和同銀錢（六グラム）に銀地金の重さ一分（九グラム）の価値を与え、更にはその和同銀錢と和同銅錢を固定相場でリンクすることにより、地金的には遥かに安価な銅錢に計数通貨価値を与えようとしたことにあるのは疑いないであろう。し

かも、いったん地金銀と和同銀錢とをリンクさせることによって、あたかも銀本位制度を装いながら、その一年後には肝心の銀錢それ自体を廃止してしまう。これでは律令政府の計画的な犯罪行為だといわれても止むを得まい。学者はこんな風にはっきり書かないので、さっぱり意味が伝わってこないが、このような仮説によってこそ、はじめて歴史が見えてくる。

しかしこのような仮説は、はたして論証不能のことであろうか。まずは当初の銀錢一枚が銅錢何枚に相当したかを当時の史料によって検証して見たい。

#### 紙幣のような和同銅錢

そのためには、当時銀地金がどのような価値を有していたか、そして和銅の銅貨を発行した頃、当時の政府は銅錢を米や絹などの物価に如何に位置付けようとしたかを調べるのが重要である。

まず、奈良・平安時代の銀地金の価値と米価との関係に関する史料を収集して見ると、次の三点を見出す。

一、天平元年（七二九）の兵衛の資材価格は、銀二両で上絹一疋、銀一両で庸布四段、米一石であった。

二、天平宝字二年（七五八）の『観世音寺奴婢帳』では「充直稻壹千二百束准銀三十両」など、全て銀一両を稻四十束に対応させている。稻二十束で米一石であるから、この場合は、銀一両が米二石に相当している。

三、『延喜式』の主計上によれば、その調を正丁一人当たり米六斗、銀一分（四分の一両）と定

めている。銀二両当たり米二・四石と等価である。以上の史料を時系列に並べて見ると、銀の価値が時代と共に上昇気味にある。その点を考慮して、和銅の頃の比価を、銀一両で米一石と考えて見よう。

一方、和同開珎発行の直後の、和銅四年（七二一）と和銅五年に、律令政府は「穀六升錢一文」、および「布一常五錢」との規定を行っている。穀六升は米三升であるから、一石では三十三文である。また布一常は二分の一段であるから、四段は四十文である。

前述したように、和銅銀錢四枚をもって銀一両に相当させようとしていたのであるから、両者の関係を対比すると、米価からは銀錢一枚で銅錢八枚、庸布価からも銀錢一枚で銅錢十枚の換算比が与えられる。かくして、和同開珎が発行された当時は、「銀錢一枚が銅錢十枚に相当する」ことを目指していたのは確実となる。ここまでの論証のプロセスは、極く常識的であり、しっかりデータさえ調べれば自然に至る結論である。専門家がなぜこんな簡単な論証を怠っていたのか。やはり計量単位に不案内の所為なのであるか。

#### 律令政府の意図

さて、それでは和銅の律令政府の政策の特徴は何にあってたのであろうか。その最大の特徴は、世界各地の自然発生的な貨幣、すなわち必然的に地金価値とは切り離せなかった金貨や銀貨とは異なり、和銅の銅錢の場合、発行当初から地金価格とは無関係な「紙幣」のようなものを意図していたことにある。これは律令政府が隠れ国債ともいうべき「打出の小槌」を入手しようとした実験で

あった。ちなみに当初の和同開珎銅錢は銅地金の二十五倍程度の価値が与えられている。したがって、純分価値で六割の和同開珎の銀錢でさえ、直ちに私鑄錢が現れたのであるから、和同開珎の銅錢に、私鑄錢が現れなかったはずがない。長い銅錢の歴史を持つ中国でも、地金価格との乖離はせいぜい数倍止まりであり、このような極端な例はない。

結局のところ、当初一石三十三文に設定した米価は、五十年後には五百文にまで値上がりしてしまった。いや、値上がりしたと言っては誤りである。銅錢の価値が私鑄錢などの存在で地金価値の近くまで下がってしまった。「頃者私鑄稍々多くして偽濫既に半ばす」の状況だったのである。

#### 和同銅錢のデノミ

これでは、律令政府の当初の意図は全く実現し得ない。そして、天平宝字四年（七六〇）皇朝十二銭のトップをきって、銅貨の万年通宝、銀貨の大平元宝、金貨の開基勝宝の三貨が発行される。

この時の銅貨万年通宝は、品質、形状、重量ともに和同銅錢と全く同じでありながら、万年通宝一枚が和同銅錢十枚と等しいとされる。そして銀錢の大平元宝は十枚の万年通宝すなわち百枚の和同銅錢と、金貨の開基勝宝は十枚の大平元宝すなわち千枚の和同銅錢に等しいと決められた。それでも金貨と銀貨は地金価格に近く設定されていたので、それらが十分に流通すれば、銅錢は補助貨幣の位置付けであり問題はなかった。しかし当時の律令政府にそんな多量の金銀の持ち合せがあるはずもない。結局、グレシャムの法則で、金銀貨は全く流通せず、銅錢の異常な格付けのみが残った。このような政策は、当然万年通宝の通貨価値を極めて不安定なものとし、折りからの惠美押勝の

乱や連年の凶作飢饉により、再び物価を暴騰へと向かわせた。

そればかりではなかった。万年通宝発行の五年後の天平神護元年（七六五）には、第二の皇朝十二銭である神功開宝が発行されている。しかも、この神功開宝にも万年通宝の十倍の公定価格が与えられた。すなわち和同開珎の銅銭に対しては、実に百倍に相当することになったのである。これでは大混乱は免れず、私鑄銭者の好餌となり、その結果、宝龜三年（七七二）には、遂に律令政府は和同銅銭の使用禁止と神功通宝と万年通宝の価値を同一とする処置を執る。かくして、万年通宝や神功通宝で表示される「文」が、かつての和同銅銭の「文」に取って替わり、かつての文の表示に近い物価水準に戻るデノミが行われた。

さて律令政府はなぜこのような政策を思い付いたか。それには当然ながら唐に前例があった。良く知られているように中国では唐代を通じて開元通宝が発行され続けていた。しかし開元通宝だけが通貨であったわけではなく、本邦の万年通宝が発行される二年前、すなわち唐の乾元元年には、開元通宝の十倍価値の乾元重宝と五十倍価値の重輪乾元重宝が発行されている。安祿山の乱の最中であつた。いずれも銅貨であつたが、十倍あるいは五十倍の重量があつたわけではない。発行者は、開元通宝の上位貨幣のつもりであつても、社会はそのように受け取らない。その結果、唐においても物価が二十倍から五十倍暴騰している。

#### 皇朝十二銭と十億倍のインフレ

このように、銅銭には一方で紙幣のように地金価値とは切り離されて発行された歴史がある。と

ころが、ここが抜群に面白いところであるが、銅銭には地金としての価値もある。物価が高騰し、銅銭が銅地金の価値まで下がれば、銅器の材料として鑄潰されてしまう。このようなことは中国では、私銷銭といわれ史上しばしば発生している。日本でも鎌倉の大仏は銅銭を鑄潰して造られている。そのような状況は、品質さえ守れば、何も政府が直接銭を発行するまでもなく、民間製造の私鑄銭でも全くかまわない事態を生じる。地金価格に近い銭の存在である。例外はあるものの、中国では地金価に近い銭がむしろ基調であつた。

かくして新銭・旧銭あわせて示される「文」は、長い歴史の間、地域を問わず、ほぼ一定の値に収斂する。実質的なデノミを繰り返しながら、時には紙幣のように、時には金銀貨と同様、地金価値のある通貨のように振る舞っていたわけである。このことは、高額通貨が全て紙幣に替わり、硬貨が完全に補助通貨に成り下がってしまった現代でさえも、繰り返されている。ソ連が崩壊した後、著しいインフレに見舞われたロシアでは、ニッケル硬貨が地金より安くなり、地金として費やされてしまった。

皇朝十二銭の歴史をもうすこし続けよう。神功通宝の後にも、隆平永宝、富寿神宝、承和昌宝、長年大宝、饒益神宝、貞観永宝、寛平大宝、延喜通宝、乾元大宝と天徳二年（九五八年）までの二百年間に九回、計十二回新しい銅銭が発行されている。その内、万年通宝、神功通宝を含んで、七回までが、旧銭の十倍の価格を付与されている。その他の場合も明記されていないだけで、十倍価で発行された可能性が高い。おそらくこの間に十億倍を超えるインフレが起こったはずであるが、銅貨の不可思議さによって、その都度自動的に新文へのデノミが行われた。これでは通貨が信用さ

れるはずがない。しかもこの頃、銅の産出が著しく減少していた。ここに皇朝十二銭は天徳二年（九五八）の乾元大宝をもって歴史の幕を閉じたのである。

### 銅銭の自律的デノミ作用

さて、実質的には億倍以上のインフレでありながら、銅銭の価値は地金価値の側面から、その都度自動的にデノミが行われ、「銭」表示の価格は、時代、地域を問わずそれほど変化しなかった。この状況を筆者の研究結果すなわち銭による米価で示して見よう。単位は全て重量一キログラム当たりである。

まず中国では、前漢時代にキロ当たり七銭、唐時代に十六銭、北宋時代に十銭と評価された例がある。一方日本では、奈良時代から平安時代にかけて八銭から九銭、平安時代末期から鎌倉時代には十六銭、室町時代から戦国時代には八銭から十銭、そして江戸時代には二十銭から四十銭であった。時代や地域を異にしながら実に安定している。それは銅銭が何時の時代、どの地域でも一匁の重量（約三・七五グラム）に造られていたからである。

もう少し調子に乗って続けると、大正時代には二十七銭、そして今日でさえも十匁銅貨を銭と見立てれば、三十銭である。ちなみに現在の十匁玉も重量的には、銭の伝統を維持して一匁である。

ついでに、もうひとつ面白いことを紹介しておこう。『漢書』によれば前漢時代の孝武元年（紀元前一二〇年）から平帝元始元年（紀元一年）までの百二十一年間に発行された五銖銭が二百八十億枚で約十万吨、現在の十匁硬貨の発行枚数も五十年間でほぼ二百八十億枚であるから偶然ながら

良く一致している。

### 抑制失う紙幣的通貨

かくして、律令政府が銅銭発行による利益を求めたのは疑いない。和同開珎発行の和銅元年（七〇八）は、平城京造営がはじまった年であり、膨大な財政支出にせまられていた。造営に動員した人夫の功賃や工事資材代金の支払いの便もあつたであろうが、主目的が資金調達にあつたことはず間違いはない。はたして律令政府の目論見はどれほど成功したのであろうか。

紙幣的な通貨が発行された歴史は圧倒的にアジアが早い。中国では元の時代に既に紙幣そのものが主要通貨として通用していた。政権さえ安定していれば、銅銭の歴史から見て、紙幣の通用はもう目前にあつたのである。これは日本でも同様であつた。江戸時代、金銀銭の三貨が併用されていたが、いずれも地金価格から大きく逸脱することはなかった。例え通貨の純分が切下げられても、物価がそれに追隨してしまつたからである。いわば西欧型の状況であつた。ところが、文化文政期になると、幕府は「一分銀」という紙幣のような貨幣を出す。当時の銀価から見ると、三分の一程度の銀純分しか含まれていなかったのであるから、実質的には紙幣である。そのことにより当時の幕府は千八百万両の出目を得ている。当時の幕府の財政規模が年二百万両に過ぎなかつたのであるから、如何に莫大な隠れ国債を発行していたかが分かる。そのため横浜開港時に大混乱が起こり、メキシコ銀（ドル貨）を持ち込んで日本は金貨を持ち出す事態が発生、物価が高騰し、結局幕府は崩壊してしまつた。

一方、金貨や銀貨に基礎を置いていたヨーロッパでは、金本位制のもとで紙幣は兌換券としてスタートしている。そのため膨大な国債を発行したことはあっても、紙幣の持つ隠れ国債としての魔力に引き込まれることはなかった。それが現在では国際通貨のドルさえ金の保証のない紙幣となっている。和同開珎は時代を先取りし過ぎたのであろうか。

通貨は発行母体の権力さえしつかりしていれば、紙でも十分である。しかし権力はいずれ衰える。しかも衰えを前にして、権力機構はその権力を守るため、歯止めなく通貨を発行するのが歴史的な必然である。その場合、金銀貨のように物量的な制約があれば、抑制が働くが、紙だと際限のない増刷に走り兼ねない。今の米国は、あたかも江戸時代の幕府のように、二百兆円にもものぼる、紙ドルを世界中にばらまいている。

今、全世界で生産されている穀物の総量が、年間四十兆円程度である。旧国鉄の債務が二十八兆円あるとか、銀行の不良資産が八十七兆円あるとか、日々繰り返して報道されているので、日本人は巨額な金額に麻痺している。しかしそれは虚の経済の話であり、実の経済ははるかに慎ましい。金や銅の地金の年間生産額がいくら三兆円に届かない。二百兆円の巨額さに驚きを持ってほしいのである。そして米国の権力に衰えが見える時、歴史はどのように繰り返されるのであろうか。

### インフレは世界の歴史

さて通貨インフレの話に戻ろう。それは、紙幣的な性格を併せ持つ銅銭だけの特徴であったであらうか。いや、決してそんなことはない。中国ではむしろ、銅銭価が地金価格とバランスしていた

時期の方が圧倒的に長く、その場合はかえってインフレは起こりにくかった。金貨や銀貨のように、純分量を低下して発行することなど不可能だったからである。通貨インフレを起こすのは、皇朝十二銭のように、十倍価の銅銭を発行する時にだけ起こる特殊状況であった。それが二百年間も続いた皇朝十二銭の時代というのは流通経済が未発達だったとはいえ、異常だったに違いない。

一方、地金価値に基礎を置く金銀貨を主体としていた西洋の場合はどうであったか。もちろん、インフレは起きている。人類はインフレの歴史なのである。ローマでは当初四・五グラムの銀貨デナリウスが通貨の単位として用いられていたが、それが何時の間にか通貨の呼称単位に成り下がりが、四世紀には元の五百分の一にまで純分を低下させてしまっている。また九世紀になってヨーロッパで復活した銀貨デナリウス(ドウニエ)も、その後同じような経過をたどり百の一の純分まで価値を下げてしまった。日本の小判すなわち両も江戸時代に十分の一まで純分重量を下げた歴史を持つ。それでも金銀に基礎をおいていただけに、多少の抑制が働き、何億倍などというインフレにはならなかった。

### 金利のツケの清算方法

インフレは世界の歴史である。金利というものが存在しない社会は別として、金利分に見合うだけ、社会が富を蓄積しないと、通貨は金利分だけ減価するのが宿命である。社会資本の蓄積と消耗がバランスしていて、純資産の増分がないような世界では、金利分がどこからも出てこない。長期的にはインフレで帳消しにするしかないのである。それにもかかわらず通貨は金利を要求し続けて

いる。

現代は、実の経済よりも虚の経済が優勢である。日本の個人金融資産千二百兆円の金利だけで、世界中の穀物を全て買占めできる計算になるが、そんな馬鹿な話はない。今や世界は、膨大な金利を吸収し続けることができるほど、社会資本の蓄積を伴うことができなくなっている。すなわち資本の充実をはるかに超えるところで虚の経済が暴れまわっている。このツケは、いずれインフレによるか、徳政令などの踏み倒しによるか、あるいは戦争により賄われなければならないのは理の当然である。残念ながら、日本の政府も、その巨大な財政赤字や不良資産問題を結局はインフレによって解消するしか方法がないであろう。それが通貨の歴史を勉強した結論である。はたして米国のドルはどうなるのであろうか。

今、日本は厳しい不況の中でデフレ傾向にある。これがまた不況を呼んでいる。しかし、世界の歴史はインフレを指し示している。インフレとは、貨幣価値の低下のことである。インフレで一番困るのは誰か。単純明快に言えば、金を持っている者すなわち金持ちである。それから社会的な弱者である老人達である。したがって「金持ちの老人」が一番インフレを恐れるのが道理である。「貧乏人の若者」はインフレを怖がらない。ものごとを単純化するというところになる。いま日本が超デフレにもかかわらず、インフレを恐れているのは、政権を「金持ちの老人」が握っているからかも知れない。

### 中世貨幣経済復活に一役

奈良朝の昔、流通機構が未熟であった時に、紙幣のような和同開珎を発行した律令政府。そしてそれを主導した藤原不比等は、よほど時代を先取りしていたのであろうか。経済の力学に逆らって皇朝十二銭の流通に努力しながら、結局は失敗してしまったものの、日本における貨幣経済は、その百年後の十二世紀に宋銭の輸入という意外な形で復活する。経済の発展が銭を要求する水準に達したからであるが、皇朝十二銭の経験が役立ったのは間違いない。隣国朝鮮では、まだほとんど銭が流通していなかった十五世紀に、日本では銭だけ持って旅行ができた。経済の発展が銭の流通を促した面もあるが、銭の流通が経済を発展させた面も大きく評価しなければなるまい。先取りしすぎた和同開珎や皇朝十二銭の失敗が、中世になって日本の経済発展に一役かったと考えると歴史は楽しい。